

修士課程2年 呉 穎容

修論タイトル：日本の博物館における演劇活動に関する研究

－博物館教育およびマーケティングの視点を中心に－

博物館における演劇活動は、日本においても一定の頻度で継続的に実施されている事例が確認され、先行研究ではその博物館教育への寄与の可能性が明らかにされてきた。しかしながら、日本における当該分野の研究は十分に蓄積されているとは言い難い。日本の事例のマクロな傾向は整理されていないと同時に、個々の事例が有する独自性についても、十分に提示されていないのが現状である。そのため、本研究では、文献調査、見学調査とヒアリング調査を通して、『日本全国博物館総覧』に記載されている施設における演劇活動の開催頻度、分野および形式などの状況を整理し、その全体的な傾向を明らかにすること、そして該当する事例と博物館教育との関連性や、日本の事例の独自性を解明すること、という二点を目的とした。

第一章では、日本における演劇教育の歴史や博物館における演劇活動の学術史を整理した上で、研究目的および研究意義を明示する。次に、本稿で取り上げられるキーワードを定義し、研究対象とする活動の範囲や、分析の方向性を提示する。さらに研究方法を述べ、本稿第三章から第五章の流れを概観する。

第二章では、博物館における演劇活動に関する先行研究を要約し、日本における当該分野の研究動向を整理した上で、その課題を明らかにする。そのうえ、第一章で示した研究目的との関連性を提示する。さらに、本稿における一つの考察方向として、マーケティングを舞台芸術の分野および博物館学に応用した先行研究を整理し、該当文献がいかに第五章における現地調査に関する考察に寄与し得るかにについて仮説を述べる。

第三章では、『全国博物館総覧』に記載される施設を対象とした文献調査の概要と方法、およびその制限を説明した上で、同調査の結果に基づき表を作成する。さらに、調査の結果に基づき、都道府県別割合順、事例の分野、実施された会場、年代別にアーカイブが確認された件数およびそれぞれの割合を集計・提示する。そして集計の結果に基づき、分析を行う。

第四章では、第三章の調査結果と第一章で述べられていた現地調査の対象館の選定方針を踏まえ、金沢21世紀美術館、博物館明治村、北上市立鬼の館、横浜市歴史博物館、の4館で現地調査を実施した理由を説明する。さらに、それぞれの対象館のホームページや出版物、および現地調査のデータに基づき、調査対象となった演劇活動の歴史や発展、および同館の活動全体における位置付けについて説明する。

第五章では、現地調査の対象館を「現代舞台芸術」（金沢21世紀美術館、博物館明治村）と「伝統芸能」（北上市立鬼の館、横浜市歴史博物館）という二つのジャンルに分け、分野別の考察を行う。現代舞台芸術の事例に対しては、博物館教育とリレーションシップ・マーケティングという二つの視点を取り上げ、教育とマーケティング効果との関連性を考察する上、日本の事例の独自性を提示する。そして伝統芸能の事例に対しては、博物館教育を主な角度にして分析を行い、該当分野を日本の事例の大半を占めている典型的なジャンルとして、その特徴と、欧米の事例や日本の現代舞台芸術の事例との異同を検討し、その独自性を明らかにする。

最終章である第六章では、第三章から第五章までの分析および考察を踏まえ、日本における当該領域の実施状況と研究動向について本稿の結論を示し、今後の課題を提示する。